流麗の錬金術師がヒーローになる話

きど

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元国家錬金術師がヒロアカ世界に転生し、他の転生者を探すためヒーローを目指すお話。

義足でオートメイル（機械鎧）。男性。

元の世界ではイシュヴァールの内戦で地雷を踏んで片脚を失った。

爆発で飛んで来た破片でできた顔の大きな傷も男前の格をひとつ上げていた。

見た目は金髪碧眼のザ…アメストリス人。

ロイ・マスタングやマース・ヒューズとは仲がよい。

マスタングが大総統になった暁には共に支えると誓いあった仲。

国家錬金術師としての二つ名は「流麗の錬金術師」。
全身や服などに仕込んだ錬成陣で踊るように空気中の水分を集め水を操る。
階級はマスタングと同じ大佐。
リョウ・ドラグニル　↓　水龍　涼

目次

序章1 …… 1
序章2 …… 6
序章3 …… 11
小学生編1 …… 15
小学生編2 …… 19
小学生編3 …… 23
小学生編4 …… 27
中学生編1 …… 31
中学生編2 …… 35
高校生編1 …… 39
高校生編2 …… 44
高校生編3 …… 47
高校生編4 ……

序章1

最後に見たものは――――ほくそ笑むマースの顔だった。

血塗れな上に、必死な形相で軍法会議所から出て行ったと聞き、血痕を辿ってーマースを追った。やっと見つけたと思ったら、電話ボックスで妙な奴に殺されそうなところだったとは笑えない話だ。

咄嗟に庇う様に前へ出る。共に誓いを立てた戦友を、こんな戦場でもない場所で失ってたまるか。

相手を付き飛ばしてから分かったことだが、銃を向けている相手は彼の優しい奥さんに見えた。どうりでコイツが反撃もせずに突っ立っていると…しかし、拳銃を向けているなんて明らかに異常だ。彼女は愛する夫にこんなことをする人間ではない。

突然、錬成反応に似る赤い光が相手を包む。ゆっくりと下からせり上がる様に肉体が変化し、奴が立っていた場所には全くの別人の姿があった。予想通り相手は彼の本当の

奥さんではなく、姿を偽っていた様だった。
一瞬で容姿が変わる…人間技じゃない。例のエルリック兄弟の件の第五研究所連中辺りが関わっていそうだと当たりを付け反撃する。
錬金術師として変身の仕組みが気になるところではあるが、今はそれどころではない。
何より、こんな卑劣な策で友人を殺されそうになったとあらば、私の腸が煮えくり返るのを抑えられるなどと、どうして言えようか!!
庇った拍子に軽く被弾したがこんなものに構っていられない。
周囲の空気から水を錬成し踊る様な動きで相手に襲わせている間、裏でマースの水人形を錬成し本人は逃した。水蒸気で爆発を起こし、マースが逃げる姿を隠す。
視界が開けると奴はすぐそこまで迫っていた。
「クソッ!余計な手ェ出しやがって!ドラグニル!お前はすっこんでろ!!」
敵が発砲した弾丸を、鋭い刃の様に錬成した水で弾き飛ばしながら考える。奴の言い草からすると、私が造ったマースの身代わり人形は上手く奴を騙せている様だ。
マースを狙い、私の顔や名前を知っているということは…敵はある程度こちらのことを調べているとみて間違いない。更にマースは軍法会議所内で負傷している。敵が軍

内部まで入り込んで来るとは…こいつの好きな人間に変身出来る能力を使えばそれも容易い、か。

しかしマースは会議所内の軍用電話ではなく、治療もしないまま態々外に出て一般の回線からどこに電話を掛けようとしていたんだ?内部で援軍を求めた方が…まさかこいつの様な奴が他にも居るのか!?…それが分からないからこそ用心していたのか…敵は一体…いや、とにかく今は友人を護ることに専念しなければ。彼が安全な場所に逃げるまでもう少し時間を稼がねばならない。

しかし、水人形はただの木偶の坊ではなく、生きた人間の様に見せる為に常に錬成し続ける必要があり体力や気力を使う。長くは保たない、早急に片をつけなければ。

「いいぜ。お前は人柱候補だがここで殺してやる!!」

防戦一方では敵にも怪しまれる。あわよくば捕縛を、と仕掛ける為に数歩踏み出せば、奴はいきなり距離を取った。

予備動作もなく、敵が再び錬成反応に似た赤い光に包まれたと思えば、そこにはマースの姿が。その姿に衝撃を受け動きを一瞬鈍らせたのが運の尽きだった。

気付いた時には――――

「いつかお前が大総統になったら、俺たちが支えてやるよ」
「それは頼もしいな」
「よく言うぜ！」

いつか大切な人たちと語った夢を思い出した。

目を開けるとそこは瓦礫の山と血の海だった。

周囲の瓦礫の山からは血が滲み出ており、多くの人間が巻き込まれたのだと推測できる。
焦げ臭い――――人の焼ける、嗅ぎ慣れた戦場の臭いだ。
あのクソ野郎はあろう事か私の友に姿を変えやがった。怯んだ拍子にやられてし

まったと思ったが、ここは一体どこだ?気絶している間にこうなったのかとも考えたが…

積み重なる瓦礫はコンクリートで、コンクリートの間からは所々鉄の棒の様なものが飛び出している。煙でよくは見えないが、遠くの街にはやけに明るい光が灯っている様に見える。やけに近代的だ。

何より――。

今の自分は軍服を着ていなおらず、それどころか、とても成人した人間の身体には見えなかった。

序章2

あれから数ヶ月が経った。

私が居た瓦礫の山は”ショッピングモール”と呼ばれる大きな市場だったらしい。
脳天ぶち抜かれたと思ったらいつの間にかあそこに居たのだ。

ここ数ヶ月の間に分かった事といえば、ここはアメストリスではなく日本という国であるという事。アメストリスという国はどこにも無く、過去そんな国があった場所も無いという事。
そしてここには錬金術はなく、代わりに個性という実に研究しがいのありそうな能力を持つ者が多く存在するという事だ。
当然、錬金術師も国家錬金術師もおらず、代わりに個性を利用して悪事を働く”敵（ヴィラン）”と呼ばれる犯罪者と、それに同じく個性を使って対抗する”ヒーロー”と

呼ばれる職業の連中が存在している。
「どうなっているんだ…」
一体全体どうなっているのか見当も付かない。
しかし、どうやらここは元いた世界とは全く別の世界のようだった。

更に起こった変化についてだが、明らかに身体が幼い子供のそれだという事である。
若返ったというよりは、顔付きも体格も自分が子供だった頃とは全く異なっている為、別人になってしまったと考えられる。
年齢は5、6歳と推定され、以前の自分やその環境の面影はどこにも無かった。

この少年の母親は例のショッピングモールで亡くなってしまったらしい。
私の方はと言えば、こちらの両親の事や世界の常識は忘れてしまったと周囲に解釈された。
正しくは全く知らないのだが、ショッピングモールの一件と母親が死んだ事によるショックで記憶喪失になってしまったと思われた様だった。

ショッピングモールでは凶悪な敵が徒党を組み複数人暴れていたところ、地震や火災が重なって大惨事になった現場だったのだと後に知った。

休日だったこともあり、死傷者は数千人に上り被害は甚大。私はその中でも数少ない生き残りらしい。

そのせいで記者たちに追いかけ回され正直ウンザリしている。

生き残り以外にも大きな材料がある。右足を失ったことだ。

気を失っている間に崩れ落ちて来た瓦礫に巻き込まれ、奇しくも前世と同じ右足を失ったのだ。顔にも前世と同じ傷跡がある。

今は全身の打撲や裂傷などの負傷に、失った片足の為車椅子での生活を余儀なくされていた。軍人ならばよくある事だが、ここは軍事国家ではないようだし今の私は軍人でもない。ましてや見た目は子供である。

自分で言うのもなんだが実に痛々しい。マスコミには格好の餌だろうな。

大惨事から生き残った事による謂れの無い誹謗中傷と、痛々しい見た目によって同情を寄せるメディアや一般大衆からの視線や声は鬱陶しかったが、生活に支障が出る程では無い為訴えるのは難しそうだなというのが正直な所だった。

何もかもを失った様だったが、そんな中ひとつ幸いなことがあった。
世界や肉体は違えど知識や記憶、あるいは魂は同一らしい。この肉体になってからも錬金術は問題なく使用出来たのだ。
それが、この異常な事態の中でも私を安心させてくれた。
科学者として受け入れがたい状況だが、何日経っても夢から覚める様子もなく、私はこれが現実である事を受け入れざるを得ないと思い知らされた。
これが現実だとすれば、まずどうにかしたいのはこの足だ。以前は機械鎧だった為、今の車椅子生活は不便でならない。
軍務がある訳でもなく、更には今はこの世界での義務教育期間である学生という身分にある為そこまでの不便という訳ではないが、やはり慣れないし違和感がある。
今は世間の奇異の目から逃れる為に、小学校には通わず家庭教師を雇っており時間はある。正直このレベルの就学なら師は必要ないのだが、この世界の言語や歴史はサッパリなので大人しく教えを乞いている。プロに話を聞く方が独学よりも効率が良いしな。
話が逸れたが、ここでの父親は大企業の社長として日々忙しくしている。その代わり、母親も居らず自分も家にあまり居られないからと言って家政婦や家庭教師を雇ってくれているのだ。つまり金もある。
最初は修理やメンテナンスの為と思って手を出したが、知識欲を刺激され原理だけは

頭の中に入っている。

自分で装着する機械鎧を造るだけなら訳も無いだろう。

序章３

私は自分の為に機械鎧を造ろうと思い立った。

幸いと言うべきか、前の世界では自分の身体の一部となる機械鎧の研究はしていたし、ちょっとした修理なら自分でしていたのだ。

問題は設計図もパーツもない中で一から造り上げなければならない点だが、それも時間と金があればなんとかなるだろう。

あとは研究熱心で根気強い錬金術師の性が本領を発揮するだけだ。

と、思っていた過去の自分を殴ってやりたい。

トライアンドエラーを繰り返し、最終的にこの世界での新しい素材で軽量化を図った機械鎧や、金属の配合を工夫し通常の鋼よりも遥かに強度を増した機械鎧を作り上げる事に成功したのだが、想像よりもかなり時間が掛かってしまった。

研究が中盤に差し掛かった頃、自宅にあった設計図や機械鎧の試作品を見た父親が支援を申し出て来た。これにより研究の時間が大幅に短縮され、内容も飛躍的に向上したのは言うまでもない。

何事にも言えることだが、量産できる体制や実験を行う研究者の人数は多ければ多い程その効率も段違いのものとなる。

父親が申し出て来るまで知らなかったのだが、彼の会社は義肢や人工臓器なんかを開発、製造、販売を行っている会社だったらしい。現代での個性社会では個性による事件や事故が多発し、喜ばしい事ではないが結構な利益が上がっている様だった。

会社は主に、負傷し身体の一部が欠損したヒーローの義肢や、身体の機能の延長としてヒーローが使用するサポートグッズ専門の部署と、そこまでの機能は無くあくまでも一般的な日常生活を送る為の医療機器専門の部署に分かれている。

私がお世話になったのはヒーロー部門の方だったが、今後医療部門の方でも展開していくつもりらしい。今回かなり特許を取ったので今後生活で金に困る事はなさそうだ。原案は自分のものではないので少し気が引けるが貰えるものは貰っておこう。この技術で助かる人間が居る訳だしな。

機械鎧の一番の課題としては、神経が残っていないと使えない点だが、こちらの世界の方が発達している技術が多い。脳の電気信号を直接受信し機械鎧を動かす研究が始動したのでその内何とかなるだろう。

こちらはもっと長い年月がかかるだろうがな。

そうして私は自ら造った機械鎧の初の装着者となり、再び地面に自分の足で立つ事が

出来る様になった。

ここまで掛かった年数は実に５年、私は小学生６年生になっていた。
時の流れとは早いものだ。
研究もひと段落したし、機械鎧のリハビリも概ね終了し日常生活を送る分には問題ないレベルになったので、中途半端な時期ではあるが小学校に通おうと思う。
今までは５年前の事件の影響から通うのを控えていたが、今はそんな何年も前の事件を騒ぎ立てる者も無く、機械鎧は服越しであれば生身の足と判別が付かない程精巧だ。誰も私が例の事件の被害者だとは分からないだろう。
製作した機械鎧の性能を図る為にも、家でじっとしているよりは外で様々な生活を送るのも良いだろうと思っている。
学校に通うのは久々だな。前の世界で通った学校は軍学校だが、それでも懐かしさを覚える。
国の歴史や単純な計算、読み書きはさておき、学んだのは軍人としての心構えや戦闘の技術、応急処置の知識、銃器の扱い方…国の為とはいえ血生臭い訓練をしていたもの

だ。

ここでは生活に必要なこと以外は、その者の将来を決める指針とする為に様々な分野の専門知識を学べる。他にも幼い頃から就学する癖を付けたり、目標を設定しそれに向け限られた時間の中でベストを尽くすというのを繰り返しさせる事で将来もそういうスパンで行動できるようにさせたりという狙いがあるのだろう。

思えばこっちではまともに外で生活したこと無かったな私。

小学生編１

今は自己紹介の時間だ。
教室の前方に立たされ、黒板に私の名前を書く教師に自己紹介を促される。
「それじゃあ自己紹介をしてね」
「はい。今日からお世話になります。水龍涼です。よろしくお願いします」
見た目からして文字通り”個性豊かな”クラスメイトらにそう挨拶すれば、元気よく挨拶が返って来る。
イシュヴァール殲滅戦に国家錬金術師として参加した自分が言うのもなんだが、私には人種差別という考えはない。自分も片足が無いし異形の人間に対し差別的意識はないが…それにしても色々な見目の者が居るな。
マースが見ればまたデタラメ人間の万国ビックリショーだとか騒ぎ出すだろう。
そう考えを巡らせながら案内された教室の１番後ろの席に座った。
前の席の羽根の生えた天使の様な男の子が元気によろしくな！と挨拶をして来てくれたので、同じようによろしくと返す。
ついでとばかりに隣の紅白頭の男の子にも挨拶をする。

これからもう1年も無いが、一緒に過ごすクラスメイトである。交友関係を築いておくのは大切だ。しかし無言で返されてしまった。

もう一度話しかけようとすれば、先程の前の席の男子に止められる。

「気にしない方がいいよ。そいつ何言っても返事ないんだ…諦めた方がいいよ」

「そう…」

それより、と男の子が話を続けようとすれば教師から注意が飛んで来た。

「そこ、静かに!それじゃあ1時間目の算数の授業を始めます。教科書を開いて。あ、そうだ、涼くんは隣の席の轟くんに見せてもらってね」

チラリと隣の「轟くん」と呼ばれた少年を見れば、教科書をこちらの方に寄せている所だった。どうやら人の話を聞かない問題児という訳ではなく、単にコミュニケーションが苦手か嫌なだけに見える。

机を寄せて教科書を見せてもらう。が、以前の世界より進んだこの世界の諸々には興味があり既に修めているし、元々科学者であるから理数系は得意だ。せっかく見せてもらっておいて何だが、その必要性はないかもしれない。

暇だし、と隣の轟少年を観察していると、彼も計算は得意なのか授業に問題はなさそうだ。

しかしさぞやつまらない、といった表情という訳でもなく、真剣に教師の話を聞いて

いる。
根は真面目な様だ。が、対人関係では心を閉ざしている、と…
彼の見た目で髪の色以外に目立つのは髪と同じく左右の眼の色も違うという、いわゆるオッドアイだという点。それから、その目にかかる程大きく無残に後を残す火傷の跡だ。
これが事故ではなく意図的にこうされたのであれば、対人関係においてこの様な態度を取るのも頷ける。
私も５年前のテロ事件の時に顔に怪我を負い、奇しくも国家錬金術師だった時と同じ場所に傷跡が残っている。
そんな顔に傷のある者同士の縁というか、親近感が沸いたのだろうか、私はその隣の席の彼、轟少年が気にかかり帰りの時間まで授業中はずっと彼を観察していた。もちろんバレない様に、だが。その程度の心得はある。
休み時間は前の席の少年やクラスメイトと話を…というか殆ど質問攻めだったが、元の世界や事件の事を話すと面倒なので軽く躱しつつみんなの事が知りたいと話題を逸らした。
素直に乗ってくれる子供たちには申し訳ないと思いつつ笑顔で対応する。

そうして私は小学校生活1日目を終えた。
なんだか疲れた…帰ったら鍛錬が必要だ。鍛えなおさねば。

小学生編２

小学校での生活にも慣れた頃。

精神年齢の違う子供たちと過ごすのは中々に疲れるが、このクラスは大人びた子が多いので助かっている。しかし子供は子供。

どうやら隣の席の轟少年はクラスの全員から無視されているようだ。少年の方が先に無視をしている様だから、こうなる事は必然だろう。

この少年は何が原因でここまでぶっちぎってしまっているんだろうか。

彼が居ない隙に天神にこっそり聞いてみた。天神とはここ数日ですっかり仲良くなったクラスメイトで、私の前の席に座っている男の子だ。天使の様な見た目で、言動もとても良い。表向きは…

他にも仲良く接してくれているクラスメイトたちにも、隣の席だから気になるのだとそれとなく聞いてみたが収穫は皆無だった。

彼について気になっているのは事実だしな。

しかし、今はそれどころではない問題が発生している。

体育の時間だ。

もちろん運動をしたところで私の機械鎧は壊れたりはしないが、問題はそこではない。

着替えだ。

着替えの際に機械鎧を見られる事を全く考慮していなかったのだ。別に見られる事自体は困った事ではないのだが、この世界の子供には少々刺激が強い様に感じるし、のテロ事件の事を蒸し返されても厄介だ。

だが背は腹に変えられない…いざ！

と思って気合を入れてみたものの…反応は最悪だった。厄介だ。めんどくさい。

どこからか5年前の事件を掘り返して来た馬鹿が居たようだ。当時メディアに追い回されていた様な状況に逆戻りしてしまった。

天神だけは人目に付かない所ではいつも通り接してくれて、機械鎧についても「かっけえ」との感想をくれた。機械鎧技師にでもなったら良いんじゃないだろうか。

彼は腹黒いので、教室では普通にみんなと同じ様にしている。私が助けを求めればきちんと応じてくれるだろうが…そんなに軟な人間じゃないと分かっているんだろう。ずる賢い奴だ。

これでこのクラスに浮いた奴が２人。
話をするにはちょうどいいかもしれない。
そう思っていると、案外早くその機会は訪れた。
意外にもこちらに話しかけたそうにしていたのは轟少年の方だった。
私の右足を見たからか、クラスでハブられ仲間になったからかは分からないが、最近話しかけるタイミングをチラチラと伺っているようだった。
放課後、他の生徒が全員帰り教室には我々のみとなった。帰り際に彼を捕まえて話をしようと思っていたのだが、どうやら彼も同じ考えだった様で、どちらも教室から動かぬままこうなったのだ。
これでも落ち着いて話が出来る訳だから支障はない。問題は何を話すのか、だ。
彼について分かっている事から推察するに、彼が何かしらの事情を抱えていて人を避けている。他人に関心がない。しかし、私との間には何か共通点を見出し話しかけようとしている、といったところか…

「あの…」

そうこう考えている内に彼の方から話掛けて来てくれた。これは都合がいい。

彼もどう話しかけるべきか思案していたのだろう。少し声が震えている。目線も床の方を彷徨い自信なさげな雰囲気だ。

今まで人と交流を絶ってきたのだから、自分から話しかけようというのは勇気のいる行為だろう。

質問の内容も大体想像が付く。となると、余計に言い出し辛い事も想像できる。

勇気を出して話そうとする子供の言葉を遮る趣味は無い。ゆっくり待たせてもらおうか。

小学生編３

彼にどうしたと言って続きを促せば、やはり足の事についてだった様だ。
「５年前のショッピングモール襲撃テロ事件を知っているか？その時に…ね。詳しい事は気絶してたから何も覚えていないんだ。聞きたい事はこれで良かったか？」
「それは…知らなかったとは言え、悪いことを…無神経…だった。悪イ。俺は自分の事しか考えてなかった…」
「いや、気にしていないし、大抵の人間はそんなものだ。相手の事まで考えてたら自分のしたい事が何もできなくなってしまう」
これは本心だ。
この子はきっと優しい子なのだろう。私の言葉を首を振って拒絶した。
「俺は…ヒーローになりてえんだ。なのに、自分の事しか考えてない最低な野郎だった…反省する。それから、話してくれたんだ。聞いた訳と、俺の事も話す。嫌じゃなかったら聞いてくれ」
「そうか。どうして話しかけてくれたのか気になっていたんだ。聞かせてくれるとありがたいな」

そうして、彼は自分がナンバー2ヒーローの息子である事、父はより強い個性を持った子供をヒーローに仕立て上げる為に”個性婚”を行った事、兄姉は片方の個性しか受け継がなかったが自分が両方の個性を発現してしまった事、父は自分に毎日厳しい訓練をさせ父の個性をモノにする様になった頃、母が自分に煮え湯を浴びせた事、自分のせいで母がおかしくなってしまった事…そして父母の愛もあり五体満足なクラスメイトたちとは仲良く話す気にはなれずにいた事、自分と同じ様に普通の人生で負う事のない様な怪我をしていた転校生に興味が湧き、話をしてみたいと思っていたという事を話してくれた。

ゆっくりだが、私に伝えようと懸命に話してくれているのが感じられる。

外はもう赤くなっていた。

「私も母の愛を知らない。テロで母は亡くなってしまった上に、私はショックでそれ以前の記憶を失ってしまっているんだ…だから、本当に母の愛を知らない…一緒だな」

そう笑いかければ、彼は傷付いた様な顔をした。しかしその裏には嬉しさが見え隠れしている。自分と同じ様な者が居て嬉しいが、ヒーローを目指す者として、いや、ひとりの人間として人の不幸を喜ぶべきではないと思っているんだろう。

国家錬金術師だった頃、私は孤児だった。母の愛を知らないのは本当だ。

「一緒じゃ…ねえよ…俺の母親はまだ生きてて、俺にはチャンスがある。ただ、俺が怖くて会いに行けねェだけなんだ…なのに…お前の母親は…もう…」
「まあ、本当に何も覚えちゃいないから、本音を言うと寂しいとも思わないしな…それに私には仕事が忙しいものの理解ある父親がいる」
　人の話だというのに少年は涙を浮かべている。自分にもまだ残っているものがあったと気付き感傷的になっている部分もあるのだろう。
「そうか…お前にもちゃんと、そうやって頼れるものがあるんだな…」
「転校生でもお前でもない。私は水龍涼だ」
「俺は轟焦凍…俺も、お前には…水龍には名前で読んで欲しい」
「分かった。轟、これからよろしく」
「ああ。よ、よろしく。水龍」
　この少年、どうも不安定だ。妙な方向にいかなければ良いが…

　もう遅い。話ならまたいつでも出来ると言って、西日が眩しい教室を出た。肩を並べて学校を後にする。分かれ道までの短い間だが、ナンバーーヒーローであるオールマイトに憧れている事など、父親以外の話をできるだけ多くしようと努力している様に感じられた。

不安定だが、自ら正しい方向に進もうとする意思を感じる、強い子だ。

小学生編４

その後は卒業までノンストップだった。クラスメイトともう少し和解したかったが、こればかりは仕方がないだろう。

ただ、轟少年の方は心境も変わった様で他のクラスメイトとも話すようになっていた。彼は元々自分からクラスメイトを無視していた仕返しとして無視されていただけだったので、全員に無視していた事を謝罪し関係を再構築した様だ。

私としても少し変わったところがある。

轟少年はヒーローになりたいのだと話していた。ナンバー１ヒーローのオールマイトの様になりたいんだそうだ。彼を越えるナンバー１ヒーローとして育てられたが、絶対に父親の様にはなりたくないとも言っていた。

他にも自分の個性の話や少年の兄姉の話も聞いたのだが、反対に自分の夢は何かと問われた時に私は返答に詰まってしまった。

ないんなら良いんだと轟は言っていたが、このご時世どんな子供でもヒーローになりたがる為、少し驚いていた様だった。

夢――――

機械鎧はもう完成したし、そもそもアレは夢とは少し違うだろう。
以前の私の夢はロイを大総統にする事だったが…それも今は叶わぬ夢だ。
「いや、本当に叶わぬ夢なのか…？」
この世界に私が居るのは、前の世界で死んだからだ。つまり…彼らが向こうの世界で天寿を全うすればこちらに来る可能性だってあるのでは…？
そうだ。私だけというのがそもそもおかしいのだ。私と同様に彼らもと考えるべきではないのだろうか。
彼らに、会いたい…これがこの世界での私の夢か…
しかしどうすれば…以前とは姿形も変わってしまっているのだ。

ヒーローだ。
この世界に私の名を轟かせれば。そうすれば――――。
私はまた彼らに会えるだろう。
そのために、生きるのだ。

私は、ヒーローになる。

ヒーローになって、彼らに見つけて貰うという新たな目標の為まずは体力だ。

前の世界でのメニューをこなす。が、身体が付いていかない…これは長い道のりになりそうだ。

一から鍛え直すというのは思ったよりも大変なようだが、無いものねだりをしても仕方がないな。

この世界でヒーローになるには免許が必要だ。ヒーローになるためにはその育成学校に入らなければならない。

この国最高峰のヒーロー育成学校は、雄英高校と言うらしい。この学校に入学する事を当面の目標とし、この世界の勉学にも励もう。その前に中学があるわけだが、そこも雄英に入りやすいレベルの中学を選ぶ必要があるだろう。

という訳で体力と知力の両方を補いつつ、私はヒーローを目指す事となった。

「夢…？」

「そうだ。轟がこの間言っていた夢の話、私にも夢ができたんだ」

「そうか…嬉しい。＃１＃の夢、聞かせてくれ」

普段あまり笑顔にならないからだろうか、多少ぎこちない笑顔を浮かべている。

「私も…ヒーローになりたい。ヒーローになって会いたい人がいるんだ」
「そうか…すごく、いい夢だな。その夢、俺にも応援させてくれ」
「ありがとう。もちろんだ。代わりと言ってはなんだが、轟の夢も応援させてくれ」

こうして季節は進み、私たちは小学校を卒業する事となった。
推薦が被るだろうから私と轟はお互い違う中学へ進学し、天神はちゃっかり私と同じ中学へ付いて来た。
まあ彼はヒーローになりたい訳ではないらしいから大丈夫だろう。
見た目に反して機械いじりなんかが好きな少年なのだ。以前も思ったが、彼は機械鎧技師にでもなることをオススメする。

そうして私は今日から、私立聡明中学の生徒となった。

中学生編１

今日は私立聡明中学の記念すべき入学式だ。

教室では何故か隣に天神がいる。こいつ…どこまで付いて来るつもりなんだろうか。機械好きのこいつは私の機械鎧に随分とご執心の様だ。

私はヒーロー科を、こいつはサポート科を目指している。という事は高校まで一緒なのか…道のりは長いな…

そんな事を考え遠い目をしつつ、入学式では眼鏡をかけた刈り上げの坊ちゃんが入試２位だったようで新入生代表の挨拶をしていた。ちなみに私は体調不良ということで事前に辞退させてもらっている。また変な目立ち方をすると学園生活に支障がな…内申に響くのはちょっと…

この学校は私立だし優秀な人間が多いだろう。彼らも雄英高校を目指しているとしたら、気を引き締める必要がありそうだ。

聡明中学には雄英高校への推薦枠がある。目下、この眼鏡くんがライバルと言った所か。

そんな事を考えている内に式は終わり、教室へ戻るとさっきの眼鏡くん…もとい、飯

田天哉くん…だったか？も、同じクラスだったようだ。独特な動きでクラスメイトに挨拶している。

これから始まる学園生活が平凡無事に終わる事を祈ろう。

まあ、そんなこんなで無事に平穏な学生生活を送れる訳がなかった。飯田少年はものすごい勢いで自己紹介をして来て、入試1位だったらしい私と一度話してみたかったんだ！良かったら勉強を教え合う仲になりたいなどと言い、あっという間に友達宣言されてしまった。嵐のような子だ。

今はクラスの全員にひとりづつ挨拶している。

クソ真面目な子なんだな、と思っていると教師が入って来てクラスメイトの自己紹介を促す。

「萩原西小から来ました！針山刺郎です！個性は身体から針を出すこと！よろしくお願いします!!」

「白沢ひかりと申します。目が光ります。よろしくお願いしますね。」
「こんにちは～！俺の名前は高度鳶尾。ちょっとだけ空を飛べるよ！」
　みな自己紹介で一様に自分の個性の話をしているが、これが普通なんだろうか。普通は趣味とか特技とか…じゃないんだろうか。ずっと引きこもって機械鎧の研究をしていたせいでこの世界の微妙な常識や感覚が分からないでいる。
　そうこう考えている内に私の番になった。
「水龍涼と言います。錬金術師です。よろしくお願いします。」
　嘘は付いていない。私の錬金術は個性ではないが、この流れで言えば個性だと思われるだろう。それを利用させてもらう。
　今の時代では個性を持っていない人間は本当に少ないらしい。そんなことで注目されてもただでさえ足のことがあるので面倒だし、無個性の人間が錬金術を使えると知られたら余計に面倒だ。だから、この錬金術を個性と勘違いしてもらう他ない。少々罪悪感があるが見逃して欲しいと思う。
　そして最後の自己紹介に差し掛かる。先程凄い勢いで友達になって去って行った飯田少年だ。
「ボクは飯田天哉！個性はエンジン！ヒーローになるため雄英高校ヒーロー科を目指している！よろしく！」

さっそくライバル登場らしい。面白くなってきた。

それからというもの、私もヒーローと雄英を目指している事を天神経由で知った飯田少年がしつこく私に付き纏い（なお本人にはその自覚は無し）共に体力作りに励んだ。

1人で鍛錬する方が気が楽なのだが、ライバルと言えども今はクラスメイトで同じヒーローを志す仲間同士！切磋琢磨し！共に強くなろう!!と押し切られてしまった。

勉強の方は同じ雄英を目指している天神も一緒にしている。

入学してからの1年はあっという間に過ぎ去った。

中学生編２

中学2年生になり、飯田少年とは別のクラスになった。しかし相変わらずこの関係は続いている。

最近はランニング中に彼がヒーローを目指す理由を聞かされた。実家がヒーロー一家なんだそうだ。なんなんだ?身近にヒーロー家族多いな。今はヒーロー飽和社会だしおかしくもないのだろうか。

轟少年と違うのは、飯田少年はヒーローである家族を誇りに思っているということだろう。特にインゲニウムという名でヒーローをやっている兄が大好きな様だ。兄のようなヒーローになりたいらしい。

それに彼の家は父親だけではなく家族全員ヒーローらしい。ニュースで見た事があるが、実に…なんと言ったか…そう、個性社会になる以前この世界で流行った概念を当てはめれば”ロボ”や”メカ”と表現できるんだったか…私には全身機械鎧にしか見えなかったので、当初は随分と驚いたものだ。

私はヒーローになってどうしても会いたい人たちが居るんだと言ったら、良い夢だなと言ってくれた。飯田もヒーローになった姿を兄に見てもらいたいそうだ。

その為にはお互い立派なヒーローにならないとな、と言っていた。

しかし、この年頃の少年少女が憧れる職業にしては、ヒーローというのはどうなのだろうか。ヒーローは軍人…というか国家錬金術師に近い。いや、そう考えれば最年少国家錬金術師のエルリックがいるからな…おかしくはないのかも…違う。そもそも比べるのがおかしいのだ。

”錬金術師よ、大衆のためにあれ”という教訓を研究費欲しさにかなぐり捨てるのが、軍の狗と呼ばれる我々国家錬金術師なのだ。人々を悪から守る憧れの対象とはまた違う。

世界観や常識の違いについて熟考していれば、いつの間にか中学3年生になっていた。受験の年だ。時が経つのは早い。

中学2年生の頃は飯田とはテストの順位を抜きつ抜かれつであったが、最近は私が1位をキープしている。真面目にここでの歴史や文学を学んだ成果だな。

成績のお陰か雄英高校ヒーロー科の推薦枠を私に、という話だったのでお受けした。計画通りである。

今日は推薦入試の日だ。定員は４人だと聞いたが…受験生は結構な人数がいる。
色んな制服があるんだなあ、と呑気な事を思いつつ校舎に入れば、見慣れた後ろ姿…というか見慣れた頭を見つけた。
「轟！」
「水龍か。久しぶりだな。お前も推薦か」
「なんとか推薦ひと枠に滑り込みって感じかな」
「そうか…悪いが試験に集中したいんだ。また後で」
「…ああ、またな」
久しぶりの再会だというのに、二言三言話してスタスタ行ってしまった。
人でも殺しそうな勢いの顔をしていたが、エンデヴァーさん…やらかしたな…。

酷い試験にならなきゃいいが。
筆記は楽勝だった。論理的な思考や知識の詰め込みならそうそう負けるつもりはない。
実技の方も抜かりはない。
こっちに来てからも錬金術の研究を怠った事はない。慣れた手つきで純白の手袋を嵌め、踏み抜き防止の鉄板を入れた硬いブーツを踏み鳴らす。

我ながら女々しい事この上ないが、お守り代わりに造った銀の懐中時計を懐にしっかり入れて更衣室を出た。

試験が終わって自宅に戻りいつも通りのルーティンをこなし床に就く。

目を閉じると、あの冷たい双眸が浮かんだ。

高校生編１

結果的に言うと試験には合格した。あまり心配もしていなかったが。

一般入試はこれからだが飯田少年も天神少年も大丈夫だろう。

案の定、教室で昼食を取っていると飯田と天神が駆け込んで来て、受かったと息も絶え絶えに報告して来た。またこいつらと3年間一緒らしい。退屈しない高校生活になりそうだ。

そういえば、轟少年も推薦入試だったようだがどうなったんだろうか。試験前に挨拶したっきりだが。

そうこうしている内に入学式の日になった。

３人揃って登校しているが、結局轟少年がどうなったかは未だ知らずにいる。連絡先も知らないのでは確かめようもないし、大方の自宅の位置は把握しているが、例の父親が居る家に勝手に赴くのは気が引けた。

発明科の天神と別れ、飯田と1―Aの教室へ向かう。随分早く来たので教室にはまだ誰もおらず、自席で本を読んで時間を潰す事にしよう。

私は窓際の1番後ろの席だったのでうたた寝しそうだな、と思いながら読書を始めた。

本を読んでいたと思ったらいつのまにか寝てしまっていたらしい。

いや、この陽気では仕方がない。最近入学して時間が無くなる事を危惧して研究に一区切り付けようと作業に没頭していたからな…きっと今日の入学式の式辞では「この春の麗らかな陽射しを浴びながら、この雄英高校の入学式を迎えられたことを～」とかいう一文が入るのだろう。

そんなことを考えながら教壇を見れば、どうやらこの小汚い男性が担任らしい。ここの教師はみなヒーローだと聞くし、この人もヒーローなんだろうか。

怠そうに見えて佇まいには無駄がない。オンオフの切り替えが激しい人なんだろうか。

体操服に着替えグラウンドに出れば個性把握テストが始まった。身体も鍛え直し錬

金術の研究も怠った日はないが、明確な数値化は重要だ。
ここで全力を出せばどこまでの事が可能なのか把握しておくにはうってつけだ。
しかし入学式にも出ないとは…少々式辞が気になるが、確かにこのテストの方が重要だろう。
時間は有限。この「相澤消太」なる人物は理にかなった行動を好むようだ。
無駄の排除を徹底しすぎているが故のあの容姿なのだろうか、とひとり納得する。近くを通ったが別に臭ったりはしなかった。時間や効率以外に頓着する性格じゃあないんだろう。
周囲の生徒の会話を盗み聞きし、個性も観察しつつそんなことを考えていると、どうやら最期のテストのようだ。
錬金術で大砲を造り砲丸を変形させ砲弾にして装填する。周囲に耳を塞ぎ口を開けるよう指示してから発射すればそれなりの射程が出た。無限にはとても敵わないが、中々の成績だろう。
成績が開示されれば、１番上に名前があった。国家錬金術師としては当然かもしれないが、少し嬉しい。
ロイが居たら勝てたかな、今日が雨なら勝てたな、とくだらないことを頭の隅で考えつつ、テストのデータを後で貰っておこうと決めた。

解散後はみんなで反省会をしていたようだが、あいにく今日は研究所だ。時間がない。断りを入れて帰ろうとすれば、緑谷少年と爆豪少年、更にはナンバー1ヒーローと言われているオールマイトの…聞いてしまってはいけないのではあろう会話を丸々聞いてしまった。

言い訳をすると出て行くタイミングがなかったのだ。ここを通らないと帰れないが、ズケズケ歩いて行く程空気が読めないのもどうかと思ったのだが…その、他人に聞かれたらマズい話をこんな誰でも通る様な場所でしている方にも…非が…あるよな…

まあいいや、帰ろう。と、一歩踏み出したところで思い出した。

そういえば轟少年の事を忘れてたな。うろ覚えだが私の斜め前の席じゃなかったか？すまない。今日の私は全く冷静じゃなかった様だな…有名に、ヒーローになれる第一歩と思ったら浮かれていたのかもしれない。

そう言えば今日は必要最低限の事はこなしていたが、雑念ばかりだった。

早く、みんなに…

高校生編2

「轟、おはよう」
「水龍か…おはよう」
「お互い合格しているとは思っていたが、おめでとう」
「ああ、お前も受かるとは思っていた。おめでとう」
翌朝一番に轟少年に挨拶すれば入試の時の様に開口一番邪険にされることはなかった。が…いかんな、こいつの目。軍人にはさして珍しくもないことだが、ここは戦争のない平和な異世界。ヒーローや敵が居る世界を平和と評して良いかは定かではないが、その議論は今は置いておいて、だ。
少なくともヒーローを目指す学生のしていい目じゃない。私? 私は別に…ヒーローになるのが本質的な目標ではないし、軍人であるからいいのだ。見る人が見ればバレるだろうが一応猫を被っているしなあ。
私の話はどうでもいい。
こいつ、中学の間にちょっと良くない方向に傾いてしまったようだ。
しかし…うーん、果たしてこれは私が口を出す問題なのだろうか。ほぼ他人の関係の

私がどうこう言うのは気が引ける…

心からヒーローを志す人間であれば、彼の家庭の事情を知っているれば何らかのアクションを起こすのだろうが…あいにく目立つためのツールとしてこの時代のこの国ではヒーローが最適かと思い、ヒーローを目指しているだけの私には同情も使命感もない。

自分のことを薄情な人間だな、と思いつつ着席すれば前方に座る女子生徒が話しかけて来た。

「あの…失礼かとも存じますが、お２人はお知り合いですの…？」

こんなこと聞いても良かったのだろうかという表情でこちらを見る彼女は…確か八百万少女。何やらドルドル身体の肌を露出している部分から物を出していた女子生徒で、昨日の個性把握テストの成績も良かったと記憶している。

何かを得ようと欲すれば、必ず同等の対価を支払うのが私が扱う錬金術だ。しかし彼女にはそれが無い。正確には、個性は身体能力だ。彼女の個性も体内の何らかのエネルギーを消費して物質を生成しているのだろうが、錬金術の基本は等価交換。錬成前の物質と錬成後の物質の化学式はイコールでなければならない。

故にどんな錬金術と似て非なる彼女の個性、研究意欲をそそられていたのだ。

「ああ、同じ小学校だったんだ。お互い雄英の推薦入学狙いだったから違う中学に入っ

たんだが…まさか同じクラスになるとはな」
「まあ！そうだったんですのね！運命的な再会…！素敵ですわ…あ、申し遅れました。私八百万百と申します。よろしくお願いしますね、水龍さん、轟さん」
「…ああ」
「いえ、こちらこそよろしくお願いしますね。八百万さん」
「はい！」
それから昨日の個性把握テストで気になっていた八百万少女の個性について聞きつつ、自分の錬金術についても軽く説明した。まあ、私の錬金術は個性ではないが。
八百万少女の創造も私の錬金術も、互いにその物質の構造や抗生物質、明確な形のイメージを理解して頭に思い描いていなければ使えない。
幼い頃からその個性の為訓練や知識の収集を欠かさなかった彼女は、その努力もさることながら、物事に対するひたむきな姿勢が研究者気質で非常に話が合う。
彼女との会話はなかなかに有意義な時間であった。

高校生編３

ナンバー１ヒーローが教室のドアから普通に入って来てヒーロー基礎学の授業が始まった。

彼がこの国で１番強い人間…と断ずるのはいささか軽率だが、トップレベルの人間の１人なのは間違いないだろう。

能力はもちろんなのだろうが、佇まいやオーラだけで敵を威嚇できる。

彼が先頭に立ちこの国を率いたら、一体何人の国家錬金術師を投入すれば勝ち目があるのだろうか…

まあこちらもただの人間ではない。簡単には勝てずとも、負けるつもりもないがね。

まずはコスチュームに着替えるという事で更衣室へ向かったが、流石に高校生でヒーロー科の生徒ともなれば色々と弁えているのか、私の身体を見て何か言う者は居なかった。多少騒ついたがその程度だ。

横からブツブツ言う声が聞こえた気もするが、気にする程でも無かった。

外野に何と言われた所で私が気にする事もないし、気にしたとしても…歩みを止める理由にはなり得ない事だ。

蒼いズボンの上からブーツを履き、ベルトを締め手袋をはめ直す。一応造ってもらった帽子を小脇に抱えて更衣室を出た。

かなり記憶に近い形に仕上がったコスチュームに気分が高揚しているのが自分でも分かる。自然と上がってしまう口角を抑え、帽子を目深に被り気を落ち着かせると、他の生徒の観察に入った。

初回の授業なので全員の実力や問題点を把握する為により実践的な授業として模擬戦を行う様だ。

学校側が保有している我々の戦闘能力や個性の詳細は、役所に登録されたものと入試の際のデータのみだ。教師側としてもその辺りの情報を早く収集しておきたいのだろう。

どの程度個人に沿った授業を行うのかは不明だが、詳細なカリキュラムを組むには現状の把握が必須だ。

他の生徒の能力やコスチュームのサポート性能を確認する良い機会だろうし、できればじっくり観察したいと思っていると、何も書かれていないボールを箱から引き当てた。

「おめでとう水龍少年!!それは大当たり!ペアになる相手が居ない代わりに１番最後に好きな相手を指名して戦えるぞ!」

何処から出したのかわざわざクラッカーを鳴らしながらオールマイトが声高らかに宣言している。

なるほど、確かに当たりらしい。

クラスメイトの対戦をざっと見た感じでは、みな将来ヒーローに可能性はあるが、当然ながら現状ではまだまだ詰めが甘かったり荒削りだったりという印象だ。

特に最初の模擬戦からアクセル全開だった爆豪少年たち…あんなんで大丈夫なのかね。特に爆豪少年は危うすぎる。彼のヒーローを目指す理由…指針が如何なるものか知らないが、それが未来の重要な分岐点で光になるか闇になるか。

フッ…彼も、名声の為にヒーローになろうとしている私にこんな事言われたくはない

だろう。私には関係のない事だったかな。まあ、敵になるなら関係はあるが。

未だ未熟だという印象を覆す訳ではないが、戦争のないこの国で、彼らは義務教育を終えたばかり。そしてヒーローになるための勉強をしに来ている学生だ。今の彼らにはこれで十二分だろうとも感じた。

隣国との恒常的な戦争や内戦の絶えない我が国では、彼らより幼いながらも、彼らより優れた兵士が大勢居た。

昨日まで酒を飲みに来ていた酒場だった、腐臭の立ち込める瓦礫の山。

ガラス玉の様にただ周囲の景色を反射する眼球。

おそらく数十名が爆死したであろう拠点で適当に拾った指や歯を、名前も確認せず遺族へ返送する袋へ投げ入れる新兵。

優れている事が良い事だとは限らないと、私はたった今、彼らによって真に理解させられた様に思う。

高校生編４

全員の模擬戦が終わり私が選んだ相手はオールマイトだった。
好きな相手を指名していいと言っていたし、ヒーローが嘘をついて良いのかと真顔で抗議したら許可が下りた。
少々意地の悪い質問だったが、彼も教師として働くなら良い勉強になっただろう。
ヒーローとしてはトップレベルだが、教師としてはまだまだ詰めが甘いので付け入りやすい印象を受ける。
まあ、プロヒーローがわんさと居る学校に敵が来る訳もなし、彼も新米教師としてゆっくり頑張って欲しい。
「準備はよろしいでしょうか？水龍さん」
「大丈夫だ。始めてくれ」
「それでは…スタートです！」
開始と終了の合図、そして何かあった時の為、先生が行っていた通信係として八百万に白羽の矢が立った。通信機から聞こえる彼女の声に応え、手袋ごと手を握り締めた。
通信を切り眼鏡型モニターに映る自分で設置した監視カメラや各種センサーの反応

を見る。

オールマイトは一応周囲のトラップを警戒しつつ、ゆっくり探索を行っている。流石に初回の授業で生徒相手ということもあってか本気ではないようだ。

1階の探索を終え二階へ上がってくる様子を捉え、仕掛けておいたトラップを発動させた。

まずは閃光弾。初手で視界を潰して動きを封じる。しかし多少怯んだものの、すぐ動いているので無駄だったらしい。

おそらく彼の個性は身体強化系のものであろうと踏み、五感から封じる作戦だったが…あの凄まじいパワーについていくだけのスピードも兼ね備えているのだろう。反応速度が常人のそれではない。

他のトラップも全く効いていないのを見て、センサー系が全滅するのも構わず建物ごと錬成して2階から上を崩壊させた。錬成を分解の段階で止めれば建造物の破壊など容易い。スカーの真似事だが、錬金術師なら破壊する対象の物質を把握していれば誰でもできるお手軽錬成だ。

屋上に放っておいたドローンからの映像では、落ちてくる瓦礫を全て殴り飛ばして平然と立っている様子が見てとれた。

「化け物だな…」

こっちが攻めているはずなのに全くそんな気分にはなれない。
彼のいで立ちとパワーからどことなくアームストロング少将を彷彿とさせられるが、桁が違う。個性とは恐ろしい能力だ…
上層階が崩落したことでこちらの居場所を察したのだろう。笑いながら自分の立つ２階の床部分に拳を叩きつけようとしているので、周囲の地面から探り当てた水道管の水を利用しオールマイトの周囲を完全に水で覆う。
平然と周囲を見渡しているのでそのまま水を球体にして溺れさせようとしたが、片腕を払う動作だけで簡単に吹き飛ばされてしまった。
錬成の暇を与えないスピードと攻撃を薙ぎ払うパワー…さっきから恐ろしいという感想しか出て来ないな。それでも彼が敵なら戦って勝つのみだが、敵に回したくは無い。
続けざまに床を薙ぎ払い錬金術で作った一階の図面には無い部屋に突入される。
核のレプリカと共に立つ私に向い、ゆっくりと笑みを携えて近づくその姿は…敵側からしてみれば悪魔以外の何者でもないな、と思った。